

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	オカザキ リョウコ 岡崎 享子	授与番号 甲 1714 号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日 2023 年 9 月 25 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	在日朝鮮人詩人金時鐘の故郷観—2000 年以降の作品を中心に—	
審査委員	(主査) 佐々 充昭 (立命館大学文学部教授)	文 京洙 (立命館大学国際関係学部元教授)
	細見 和之 (京都大学大学院教授)	
論文内容の要旨	<p>本論文は、序章と終章、および本論全 3 部 7 章で構成される。各章の内容は以下の通りである。</p> <p>まず序章において、在日朝鮮人文学における金時鐘の評価と位置付けに関して先行研究の動向を概観し、それを踏まえた上で問題意識が述べられる。第 I 部 (第 1~3 章) 第 1 章では、金時鐘の言語観を「日本語」、「朝鮮語」、「在日朝鮮人語としての日本語」、「生理の言語」の 4 つに分類し、これらの言語観の形成過程について金時鐘の経歴を年代毎に辿りながら検討する。金時鐘は 2000 年以降に尹東柱の朝鮮語詩集『空と風と星と詩』の翻訳と金素雲の『朝鮮詩集』の再翻訳を試みた。第 2 章では、この翻訳が植民地時代に失われた「朝鮮語」と出会い直す作業となったことが論じられる。第 3 章では、朝鮮語のカタカナ表記の分析を通じて、金時鐘の唱える「在日朝鮮人語としての日本語」とはいかなるものであるのか検討し、さらに最新作「献詩」(2022) の分析を通じて、「生理の言語」とは父母から伝えられる故郷の言語であり、金時鐘の言語観の根底にあるものであることが明らかにされる。</p> <p>第 II 部 (第 4~5 章) では、第 7 詩集『失くした季節』(2010) について詳細な分析が行われる。第 4 章では、2000 年以降における金時鐘の済州 4・3 体験証言やそれに関する金時鐘と金石範との対談について検討し、さらに第 1 詩集『地平線』(1955) や第 5 詩集『光州詩片』(1983) の分析を通じて、金時鐘が体験証言以前にすでに済州 4・3 体験を断片的に書いていた事実が明らかにされる。第 5 章では、植民地解放の「夏」から済州 4・3 の「春」へと移り変わる金時鐘独自の季節観について論じられる。また、『失くした季節』と同時期に取り組んでいた尹東柱の翻訳作品を比較することで、「在所」という詩語が尹東柱の詩の「□□□」から訳出されたものであり、尹東柱の故郷観が金時鐘に影響を与えた事実が明らかにされる。さらに、済州 4・3 犠牲者の遺体が漂着した対馬で済州 4・3 慰霊祭に関する取り組みに関わった事実を紹介し、金時鐘が慰霊という形で、日本にいながら故郷である済州島と繋がろうとしたことが指摘される。</p> <p>第 III 部 (第 6~7 章) では、第 8 詩集である『背中の地図』(2018) について詳細な分析が行われる。第 6 章では『背中の地図』の制作背景と意図について検討し、済州 4・3</p>	

	<p>当時に見た水葬による死者の様子が、3・11の津波の死者と重なり合うように描かれている点や、新潟港から船に乗って朝鮮民主主義人民共和国へと向かう帰国事業の記憶がこの作品に描かれている点などが明らかにされる。第7章では、『背中の地図』の重要なテーマである原発批判について検討し、作品中の登場人物である「私」の心象風景を辿ることで、本作品の大きなテーマが「故郷喪失」であることが論じられる。</p> <p>終章では本論の結論が述べられる。猪飼野に流れる平野川の水路が海へと繋がっていく様子を描いた「献詩」の分析を通じて、「在日を生きる」金時鐘が「生理の言語」の重要性を語り、人生の最晩年で最終的に帰ろうとしている場所が済州島であること、そこはまた自らが幼少期を過ごし、両親が眠る故郷であることが結論として提示される。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>本論文で高く評価すべき点は、2000年代以降に発表された金時鐘の評論や創作詩の意義を明らかにした点にある。2000年以降、金時鐘が済州4・3の体験を直接公的に語り始めた背景には、韓国の民主化という朝鮮半島をめぐる状況の変化と、それに呼応して相互作用した在日朝鮮人の取り組みが存在した。そのような歴史的意味を十分に踏まえた上で、いまだ研究が進んでいない比較的新しい金時鐘の創作詩集を詳細に分析し、作品としての意義を明らかにしたことが本研究の独創的な点である。特に済州4・3と関連づけながら『失くした季節』を解説し、また『背中の地図』において3・11東日本大震災の故郷喪失者と金時鐘の故郷喪失体験とを重ね合わせながら分析するといった解析手法は、新たな研究視点を提示する独創的なものである。金時鐘が自ら帰るべき故郷として済州島を強く意識していったという解釈も、新しい金時鐘論として評価できる。</p> <p>また、本論文では、申請者の朝鮮語読解能力が十分に発揮されている点が大きな特色となっている。本論文では、尹東柱や金素雲の朝鮮語詩集の翻訳作業が、2000年以降における金時鐘の創作詩に影響を及ぼしているとする新たな論点が提示されている。このような分析は、申請者の朝鮮語理解が十分に生かされたものであり、日本語での作品分析を中心とする従来の金時鐘研究に対して新たな問題意識を喚起しているという点で、学術的に高く評価できるものである。さらに申請者は本研究の過程で、金時鐘本人と会って交流を重ね、済州島に同行するなどして、直接本人からインタビューを試みている。その成果として、対馬における済州4・3慰霊祭の様子や、「献詞」といった金時鐘の最新作品に関する詳細な情報を入手し、それをもとに『猪飼野詩集』に未収録の詩である「チノギの船」について、既存の金時鐘像の枠組みにとどまらない新たな解釈の可能性について論じている。この点も、本論文の大きな研究成果として評価できる。</p> <p>しかし、以下のような問題点も公開審査において指摘された。帰国事業に関して金時鐘の体験をより詳細に検討する必要がある点、『失くした季節』における金時鐘の季節観のうち、「夏」に対するイメージの多義性について検討の余地がある点、金時鐘の言語観（特に「生理の言語」）に関して、先行研究との違いをより明確に提示すべき点、金時鐘の作品に描かれている内容をそのまま歴史的事実として見なして良いかという点、創作詩に対して分析的な解釈にとどまるだけでなく、そこから作品の本質を総合的・全体的な見地から捉え直す作業が必要である点などが指摘された。特に本論文の結論に関しては、「ディアスポラ」の概念と関連して、「在日」の問題が「民族」や「国民」の論理に収斂されていってしまう「齟齬／乖離」を問題にすべきであり、「<在日>という存在が日本にも朝鮮半島にも開かれている存在」という視点が重要であるという問題提起が公開審査におい</p>

	<p>てなされた。申請者はこれらの指摘に対して、本論文の記述の意図や今後の研究の展望などを真摯に語ることで、十分な回答を行うことができた。また審査委員会もこれらの問題が本論文の学術的な価値を損なうものではないことを確認した。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p>試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は 2023 年 7 月 7 日（金）16 時 30 分から 18 時まで、衣笠キャンパス清心館 SE007 号教室で行われた。</p> <p>審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である「在日朝鮮人文学」について、在日朝鮮人史、ディアスポラ文学、東アジア思想全般に関する申請者の基本的知識や、文学作品の解析方法等について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。</p> <p>本論文の内容については、本学大学院文学研究科現代東アジア言語・文化学専攻博士後期課程在籍期間中に国内外の学会・研究会において多数の口頭発表がなされており、さらに第 2、3、6 章の一部については、すでに査読付き学術雑誌に掲載され、高い評価を受けている。また申請者は研究成果の国際的発信に積極的に取り組み、国際学会で英語や朝鮮語での研究報告を行っていることから、十分な外国語の能力を有していることを確認できた。これらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>